第6学年 社会科 学習指導案

1. 小単元名『武士の政治が始まる』

(教科書：『小学社会 6 上』 p. 38～46／学習指導要領：内容（1）ウ）

2. 小単元の目標

武士による政治が始まった経緯や鎌倉幕府の仕組みを調べ、武士の政治や暮らしについて理解する。

3. 小単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象についての 知識・理解
武士による政治の仕組みや人々との関係について興味・関心をもって調べようとしている。	武士の世の中の特徴や鎌倉幕府の政治の経過を考え、表現している。	想像図や絵図、写真などをもとに、武士の時代の政治や暮らしについて調べ、まとめている。	鎌倉幕府が成立した経緯と、その政治の仕組みについて理解している。

4. 指導にあたって

(1) 児童の実態

元気な子どもたちである。様々な場面で指導を重ね、話の聞き方など、学習のきまりを守り、落ち着いて学習に取り組めるようになってきた。

社会科に限らず「根拠をもって考える」ことに対して苦手意識がある子が少なくない。観点を示したうえでの調べ学習などには一生懸命に取り組もうとする子も増えてきたが、調べて何がわかったのかを把握するのが難しい子もいる実態を考え、単元導入時には、子どもたちが「これからこんな学習をしていきたい！」という学びの意欲を高めたり、単元のゴールを見据えて大まかな解決の見通しをもたせたりして、学習を進めるうえでのエネルギーと方向性をもたせるようにしてきた。また、これまでの学習を「振り返り」時間を設定し、子ども自らがどのようなことがわかったのかを確認し、学習内容のより確実な定着を図るようにしている。

しかし、答えをわかっている自信がなければ、みんなの前での挙手や発表をためらう子もおり、学級全体として考えを発表することに対して積極的とはいえない。そのため、自分の意見と友だちの意見の差異をとらえつつ、自分の考えに自信をもたせるために、自力解決が終わった後や自力解決でつまづいたときなど、必要に応じて周りの人と交流する活動を取り入れ、全体交流の活性化を目ざしている。

また、歴史に対する興味・関心を高めるために、まんが『日本の歴史』を教室に置いて、気軽に読めるようにしたり、教科書で取り上げられている人物の似顔絵と主な業績などが印刷されているトランプを一人一組ずつ配付したりしている。人物の似顔絵から、人物名やその人の業績を当てるクイズを行うなど、自分たちで工夫して、遊びを通してながら歴史上の人物について理解しようとする子どもたちも増えてきている。

武士についての学習は、これまでの豪族、天皇、貴族などについての学習よりも、子どもたちの

学習意欲が高い。鎧や兜、刀や弓矢といった侍の武器や防具、戦の様子などに興味を示す子が多く見られる。子どもたちの学習意欲を高めながら、調べる力、調べてわかったことをもとに考える力をつけるようにしていきたい。

(2) 教材について

本小単元では、日本が今までに二度しか経験していない、外国の大軍から攻められたできごとの一つ、「元寇」の学習がある。未曾有の危機を救った御家人の思いや努力に迫ることで、学習の前には「そんなこと知っているよ」「興味がない」「よくわからない」という意識だった子どもたちが、「自分だったらどうするだろう」「よくそんなことができたな」という意識へと高まっていくような授業、社会科好きが増えてどの子も熱中するような授業に近づくのではないかと考えた。

そこで本時では、北条時宗の営みとして、御家人に命じて元と戦わせたこと、防塁を築かせたこと、元との戦いでは新しく獲得した土地がなかったため、十分な褒美を与えることができなかったことを取り上げる。そして、私財をなげうって戦の準備をして、命がけで戦った御家人が、十分な褒美を与えられることなく再び元と戦わなければならなかった弘安の役について学び、当時の御家人の気持ちを考えるようにする。

「せっかく幕府の命令どおりに戦ったのに、褒美の土地を与えないなんてずるい」という幕府に対する不平不満の気持ちを考えるだけではなく、「命がけ」「自分たちの土地を守る」「大切なものために戦う」という御家人の心意気にも、考えが及ぶようにしたい。

そのためには、『蒙古襲来絵詞』と関連づけて、元軍が多国籍軍だったのは敗戦国の人々が元軍に参加させられたためであることなど、元に負けた国の惨状を必要最小限度の情報量で子どもたちに驚きを与えるように工夫して伝え、文永の役が大変な戦いであった事実、その後の御家人に対する褒美の実態と合わせながら、御家人の気持ちを考えさせるようにしたい。

追究場面で取り扱う資料『蒙古襲来絵詞』から、元軍が多国籍軍だったこと、それぞれの兵士の装備や戦法について着目するとほぼ全ての要素が元軍有利となることが読み取れる。しかし、この絵は必ずしも元寇の様子を忠実に再現したものではない。『蒙古襲来絵詞』を描かせた竹崎季長にとって都合のよいように表現されている部分や、完成後に描き加えられた部分、おかしいと思われる点がある。たとえば、竹崎季長の兜に刺さっている細い矢は、竹崎季長が「ここにも刺さった」と後から自分で描き加えたものとされる。中心に描かれている元軍の3人と「てつほう」は、後世に描き加えられたものと考えられている。また、おかしいと思われる点として、「てつほう」の破裂の向きがある。

絵をよく見ると、竹崎季長の兜のシコロ（後頭部の部分）は赤色で、鎧のオドシは萌葱色である。この頃は鎧兜を同じ色で統一していたので、この点もおかしな部分であるが、これは出陣の際に竹崎季長が知り合いの江田又太郎秀家という人と兜を交換して目立つようにし、お互いに手柄の証人となるようにしていたためである。竹崎季長をはじめ、当時の御家人にとって、いかに自分の「奉公」を目立たせ、「ご恩」を得るために一生懸命であったかが、このことから垣間見える。

(3) 指導上の工夫・留意点

子どもたちが歴史学習を行っていくうえで、5年生までの学習と異なることは、現在学習してい

る事象を直接見たり、聞いたりすることができないということである。ここに、歴史学習の難しさと面白さが混在している。実際に聞き取り調査を行ったり、見学を行わなければ社会科学習とならないわけではない。各種資料をもとに、自分自身の想像の世界で、大きく広く、個々の歴史的事象に対するイメージをもつことも大切な学習のプロセスとなってくると考える。そのことを意識しながら、本小単元では、平安時代中期の武士のおこりから鎌倉幕府の滅亡までを、通史的・網羅的な学習にならないように、「武士の暮らし」「源氏と平氏のたたかい」「鎌倉幕府の仕組み」「元寇」の四つの学習場面に分け、それぞれ1時間で歴史上の人物に焦点を当てながら学習を進めていく。

歴史上の人物については、その思いや業績を知ること、子どもたちが共感的に理解を深めていたり、国や郷土に対する誇りや愛着をもったりすることにも繋がっていくであろう。そのために大切なのは、それぞれの学習場面に通じる基礎・基本を明らかにしたうえで、歴史上の人物のどんな営みに対して共感的な理解を深めるのがよいのか、を考えることである。本小単元では、「武士の暮らし」「源氏と平氏のたたかい」「鎌倉幕府の仕組み」「元寇」のいずれも、「土地を仲立ちとした主従関係」が基礎・基本となる考え方であるとおさえた。武士にとって土地とはどのようなものなのかということを理解しないと、この時代の歴史上の人物の営みに対して納得したり共感したりすることは難しい。

平安時代中期の武士のおこりから鎌倉幕府の滅亡までは、起承転結の大きな流れになっていると考える。起は「源平の戦い」。承が「鎌倉幕府の確立」。転が「元寇」。結が「鎌倉幕府滅亡」。

ここでは、「転」にあたる「元寇」の場面を本時として取り上げる。未曾有の危機を救った御家人の思いや努力に迫ることで、「ご恩」を求めて「奉公」する御家人の営みを共感的に理解できる。また「ご恩と奉公」の関係が崩れたことが、鎌倉幕府滅亡へとつながることも理解できる。

また、授業における起承転結の「転」を、既習を生かし、より深く考えるような学習場面ととらえて、「1180年以降の源平の主な戦い『石橋山の戦い』『富士川の戦い』『倶利伽羅峠の戦い』『一ノ谷の戦い』『屋島の戦い』『壇ノ浦の戦い』のうち、源頼朝の戦わなかった戦はあるのか」「鎌倉時代になって、土地はほとんど武士のものだったのか」など、授業の終末場面で子どもたちの既存の思考を揺さぶり、より深く学習内容を理解できるような場面も設定した。

本小単元では、様々な場面で歴史的事象について資料をもとに調べ、わかったことをもとに人物の営みや心情について考えるような学習を進めていく。そうすることによって、基礎・基本の定着とともに、歴史を学習することが好きな子、歴史を学習することの面白さを感じる子を少しでも増やしていけると考える。

資料をもとに調べる際には、比較の手法を今までの学習以上に取り入れる。

武士の館と貴族の屋敷の違い。平氏と源氏の政治の違い。鎌倉と京都の違い。元軍と幕府軍の違い。文永の役と弘安の役の違い。鎌倉幕府確立の頃の「ご恩と奉公」の関係と元寇の後の「ご恩と奉公」の関係の違い。比較の手法をとることで、社会科が苦手な子どもでも特徴がおさえやすくなる。

小単元の最後には、教科書 p.46「まとめる」を活用して、単元の学習を「振り返る」時間を設定する。学んだことや考えたことを振り返って整理する時間を設定することで、子ども自らがどのようなことがわかったのかを確認することができ、学習内容のより確実な定着を図ることができる。そして、今後の学習においても、既習を生かして考えをもつための基盤となると考える。

5. 小単元の指導計画（総時数5時間）

時	ねらい	○学習活動 ・内容	◎使う資料 ◇留意点 ◆評価
① (つかむ)	<p>武士の館の想像図から、武士がどのような暮らしをしていたのかを読み取り、武士が力をもつ世の中について調べていこうとする意欲をもつ。</p>	<p>○みんながもっている武士のイメージを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・刀を持っている、戦をする、鎧や兜を着けているなど <p>○武士はいつも戦っていたのか予想する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦っていたのではないか。 ・いつもではないと思う。 <p>○武士はどんな暮らしをしていたのかを、「武士の館」（想像図）を読み取り、考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>武士はどんな暮らしをしていたのか考えよう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな人がいるか／何をしているか／生き物／建物の様子／周りの様子 <p>○貴族の暮らしと違うところはどこかを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食事が違う。・服装が違う。 ・屋敷の様子が違う。・仕事が違う。 <p>○普段は田畑を耕したり、原野を開墾したりしていたこと、戦いに備えて、武芸の練習もしていたことをおさえる。</p> <p>○これから取り組む単元の学習問題を設定する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>武士が現れて、世の中はどのように変わったのか。</p> </div>	<p>◎武士の館（想像図）</p> <p>◇教科書中の「学びの手びき」を活用する。</p> <p>◆武士の館の想像図から、武士の暮らしの様子に関心を持ち、調べたいことを見つけている。 (関・意・態／行動・発言)</p> <p>◆武士の世の中は武芸との繋がりが強く、土地を守るために戦いへの備えが重視されていたことをつかんでいる。 (思・判・表／対話・ノート)</p>
② (調べる)	<p>源氏と平氏の戦いを調べ、武士が力をもってきた経緯をつかむことができるようにする。</p>	<p>○「平治の乱」を描いた資料から、武士の戦いの様子を読み取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんな人がいるか。 ・どんな行動をとっているか。 ・逃げているのはどんな人か。 <p>○武士が戦いを通して力をつけてきたこと、特に力をのばした武士団が平氏と源氏であることをおさえ、平氏や源氏が力をのばしていった様子を調べる。</p>	<p>◎資料『平治物語絵巻』</p> <p>◇この戦いに勝利した平氏が、貴族を抑えて政治の実権を握ったことを確認する。</p>

		<p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">平氏や源氏が力をのびた様子を調べよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平氏は中国地方や瀬戸内海が拠点だった。 ・源氏は関東地方が拠点だった。 ・最初に実権を握ったのは平氏だった。平清盛が武士として初めて太政大臣になった。 ・朝廷の重要な地位を独占した。 ・平氏に不満をもつ人が増えた。 ・源頼朝が平氏を倒す戦いを始めた。 ・壇ノ浦の戦いで、平氏が滅びた。 <p>○資料「源氏と平氏が戦った場所」を提示し、源頼朝が参加しなかった戦いがあるかどうかを問いかけ、なぜ、石橋山の戦いと富士川の戦いにしか参加せず、あとは源義経や木曾義仲らに戦わせたのかを予想させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・武士中心の政治を進める準備をしていたのかな。 ・負けるのが怖かったのかな。 <p>○平氏と源氏は戦いを重ね、壇ノ浦の戦いで平氏が滅びたことと、その後、源頼朝が鎌倉に幕府を開いたことをおさえる。</p>	<p>◎教科書中の各資料</p> <p>◆平氏の隆盛から源平の戦いを経て、武士が力をつけていった経緯をつかんでいる。 (知・理／ノート・発言)</p> <p>◇平清盛、源頼朝、源義経など、具体的な人物の営みに着目させるようにする。</p> <p>◎教科書中の資料「源氏と平氏が戦った場所」</p> <p>◇平氏が朝廷との関係を強めて、貴族の政治と同じような支配をしたことや、それに対する不満があったことを確認する。</p>
<p>③ (調べる)</p>	<p>「ご恩」と「奉公」に象徴される幕府と御家人の関係や、鎌倉幕府の政治の仕組みを理解することができるようにする。</p>	<p>○鎌倉幕府の仕組みを調べる。</p> <p style="border: 1px solid black; padding: 5px;">源頼朝が開いた鎌倉幕府の政治の仕組みを調べよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・鎌倉はどんな場所か。 ・武士との関係はどうか。 <p>○「ご恩と奉公」「いざ鎌倉」という言葉を手がかりにして、幕府と御家人の関係について考え、話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幕府(将軍)は、御家人(武士)がもっている領地を守る。 ・手柄に応じて、領地を与える。 ・守護や地頭の役につかせる。 	<p>◎教科書中の各資料</p> <p>◆鎌倉周辺の土地の様子を読み取り、その特徴と、頼朝が鎌倉に幕府を開いたこととのつながりを捉えている。 (技／ノート・発言)</p> <p>◇鎌倉の地形的な特徴を読み取り、これまでの政治の中心地との違いに気づくようにする。</p>

		<ul style="list-style-type: none"> ・御家人（武士）は、自分の土地を守り、さらに領地をもらうため、幕府（将軍）のために命をかけて戦う。 ・守護や地頭となって働く。 ・鎌倉の警備をする。 <p>○鎌倉幕府が開かれた頃、土地はほとんど武士のものだったのかと問いかけ、「土地の約半分は天皇のものだったこと」「朝廷が幕府を倒そうとするが、北条政子の演説で御家人が団結し、朝廷の軍を破り、幕府の危機を救ったこと」「幕府の力がますます強まったこと」をおさえる。</p>	<p>◆「ご恩」と「奉公」の意味をつかみ、幕府の政治の仕組み、幕府と御家人の関係について理解している。 (知・理／ノート・発言)</p>
<p>④ (調べる) 【本時】</p>	<p>元との戦いの様子を調べて、御家人がどのように戦ったかをおさえ、戦った御家人の気持ちを考えることができるようにする。</p>	<p>○元軍との戦いの資料（『蒙古襲来絵詞』）から、1度めの元軍と御家人の戦い方の特徴を読み取り、まとめて発表する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>御家人はどんな思いで戦ったのか考えよう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・武器の違い ・防具の違い ・戦い方の違い ・戦いの結果 <p>○この後、幕府はどうしたのか予想する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・きっと土地を与えたはずだよ。「ご恩」と「奉公」の関係だから。 ・でも新しい土地を勝ち取ったわけではないから、褒美の土地はあまりなかったのでは。 <p>○1度めの戦い（文永の役）では、苦戦しながら戦ったのに、幕府からは褒美の土地をほとんどもらえなかったこと、そのうえ幕府は九州の御家人に費用を出させて防塁を築かせたことをおさえたいので、御家人は、2度めの戦い（弘安の役）の最中、どんな気持ちだったかを考える。</p>	<p>○元軍との戦い（『蒙古襲来絵詞』）</p> <p>◆元軍と御家人の戦い方や武器、防具の違いを読み取っている。 (技／ワークシート・発言)</p> <p>○教科書中の各資料 ◇子どもの発言を受けて、随時資料を提示する。</p> <p>○元軍との戦いに向かう竹崎季長の一行（『蒙古襲来絵詞』）</p> <p>◆人数や武器の違いなどから考えて不利な戦いであり、褒美も十分に保証されなかったにもかかわらず、戦いに挑んだ御家人の気持ちを考えている。 (思・判・表／ワークシート・対話)</p>

⑤ (まとめ)	元寇をきっかけに鎌倉幕府の力が衰えて鎌倉幕府が滅亡したことをとらえ、本小単元の学習を振り返ることができるようにする。	<p>○元との戦いの後、御家人たちは褒美の土地をもらえたのかを予想する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たぶんほとんどもらえない。 ・お金に困るから、幕府はなんとか褒美の土地をあげたのではないか。 <p>○褒美の土地をほとんどもらえなかったため、御家人が幕府に不満をもち、やがて鎌倉幕府が滅亡したことをおさえ、教科書 p.46 の「まとめ」を活用して、これまでの学習を振り返る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">これまでの学習を振り返ろう。</div>	<p>◇小単元のキーワード「武士」「鎌倉幕府」「ご恩と奉公」「元との戦い」に注目して、学習を振り返るようにする。</p> <p>◆学習を振り返り、本小単元でわかったことや考えたことを、年表、鎌倉幕府と御家人の関係図などにまとめている。 (知・理／ノート・発言)</p>
------------	--	---	--

6. 本時の指導（第4時）

(1) 本時のねらい

元との戦いの様子を調べて、御家人がどのように戦ったかをおさえ、戦った御家人の気持ちを考えることができるようにする。

(2) 本時の展開

時配	○学習活動 T：発問 C：児童の反応	◎使う資料 ◇留意点 ◆評価
7	<p>○本時では元軍との戦いについて学習することを確認し、普通に考えれば数の多い方が勝つこと、元寇の場合は結果が違うことをおさえ、子どもの追究の意欲を高める。</p> <p>T：鎌倉時代に、4万人対1万人の戦があったよ。どちらが勝ったと思う？</p> <p>C：普通に考えたら、4万人が勝つよ。</p> <p>C：もしかしたら、1万人の方が勝ったかもしれない。</p> <p>T：この戦い、実は1万人の方が勝ったんだ。この戦の様子がわかる資料があるよ。この「元軍との戦い」の資料には、どんな人がいるかな。</p> <p>C：武士がいる。馬から落ちそう。馬が血を流している。</p> <p>C：逃げている人もいる。日本人ではないようだ。黒い顔の人と、黄色い顔の人がいる。</p> <p>T：どちら側が4万人で、どちら側が1万人かな。</p> <p>C：左側が4万人の元の軍隊の方だ。</p> <p>C：右側が1万人の御家人たちの方だな。</p> <p>C：元の大軍が攻めてきたんだ。</p>	<p>◇元軍と幕府軍との戦いだということは、最初は伏せておく。両軍の兵力については諸説あるが、具体的な数を示すことで追究の意欲を高めたい。</p> <p>◎元軍との戦い（『蒙古襲来絵詞』）</p> <p>◇日本の武士（御家人）と日本人以外の兵がいること、顔の色の違いから、相手は多国籍軍であることに気づくようにして、元軍と幕府軍との戦いだということを知らせる。</p> <p>◎モンゴルの広がり（教科書中の資料）</p>

<p>20</p>	<p>○本時の問いを設定し、元軍と御家人の戦い方の特徴を読み取る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>御家人はどんな思いで戦ったのか考えよう。</p> </div> <p>T：元軍と御家人たちの戦いの特徴はなんだろう。「元軍との戦い」などを読み取って、まとめよう。</p> <p>C：武器の違い…毒矢・連射ができる弓矢・てつほうを使った元軍。大きな弓・たくさんの矢を持っている御家人。</p> <p>C：防具の違い…兜を着けている元軍。元軍は身軽な感じ。鎧と兜が丈夫そうな御家人。御家人は動きにくい感じ。</p> <p>C：戦い方…集団で戦う元軍。一騎打ちする御家人。</p> <p>○読み取ったことを発表し合い、御家人にとって苦しい戦いだったことをおさえる。</p> <p>T：それでは、読み取ったことを発表しましょう。戦いの結果はどうだったのかな。</p> <p>C：御家人にとっては苦しい戦いだった。でも、必死に戦って、元軍を退けた。</p> <p>T：御家人は幕府の命令を受けて戦い、攻めてきた元軍を追い払ったんだね。それに対して、このあと幕府はどうしたのかな。</p> <p>C：きっと土地を与えたはずだよ。ご恩と奉公の関係だもの。</p> <p>C：でも、新しい土地を勝ち取ったわけじゃないから、褒美の土地はあまりなかったのでは。</p> <p>T：教科書の資料を読もう。多くの御家人たちは、苦戦しながら戦ったのに、褒美の土地をあまりもらえなかったようだね。</p> <p>T：博多湾の防塁の写真を見よう。幕府は九州の御家人たちに費用を出させて、防塁を築かせたそうだよ。</p>	<p>◎元軍との戦い（『蒙古襲来絵詞』）</p> <p>◆元軍と御家人の戦い方や武器、防具の違いを読み取っている。（技／ワークシート・発言）</p> <p>◇武器や防具、戦法など、具体的な読み取りの観点を示すようにする。</p> <p>◇北条時宗が御家人に命じて元と戦わせたこと、防塁を築かせたこと、元との戦いでは新しく獲得した土地がなかったため、十分な褒美を与えることができなかったことをおさえる。</p> <p>◎元軍との戦いに向かう竹崎季長の一行（『蒙古襲来絵詞』）</p> <p>◎博多湾（福岡県）の防塁（教科書中の資料）</p>
<p>18</p>	<p>○1度めの戦い（文永の役）では、苦戦しながら戦ったのに幕府からは褒美の土地をほとんどもらえなかったこと、そのうえ幕府は九州の御家人に費用を出させて防塁を築かせたことをおさえたうえで、御家人は、2度めの戦い（弘安の役）の最中、どんな気持ちだったかを考える。</p> <p>T：元軍の進路を見よう。元が、今度は14万人で攻めてきた。もしあなたが御家人だったら、戦いに行きますか。</p>	<p>◎元軍の進路（教科書中の資料）</p> <p>◇自分が御家人だったなら、2度めの戦いに行くか行かないか選択し、その理由を考えるように促す。</p>

<p>C：行くよ！負けたくない。占領されちゃう。自分の土地がなくなるかもしれない。幕府から褒美がもらえるかもしれない。</p> <p>C：行かないよ！死にたくない。たぶん褒美がない。戦ってもいいことがない。</p> <p>T：でも、元と戦って負けたら、対馬や壱岐・高麗などのように大変なことになる。元軍に負けた国の人たちが、元軍と一緒に戦わされていたんだ。</p> <p>T：御家人は、2度めの戦いの最中、どんな気持ちだったのかな。考えたことをワークシートに書きましょう。（ワークシートに記入する）</p> <p>T：それでは、御家人の気持ちを発表しましょう。</p> <p>C：死にたくない。でも、褒美がなくても、元と戦わなきゃ大変なことになる。負けるわけにはいかない。</p> <p>C：戦で目立って、必ず褒美を手に入れるぞ。絶対勝つ。自分たちの土地を守るぞ。</p> <p>T：今日の学習の振り返りをしましょう。</p> <p>○次時の予告をする。</p> <p>T：次の時間は、元との2度の戦いの結果、どうなったかを学習して、この単元全体の学習の振り返りも行いましょう。</p>	<p>◇元軍が多国籍軍だったのは敗戦国の人々が元軍に参加させられたためであることなど、元に負けた国の惨状を必要最小限度の情報量で子どもたちに驚きを与えるように工夫して伝える。</p> <p>◆人数や武器の違いなどから考えて不利な戦いであり、褒美も十分に保証されなかったにもかかわらず、戦いに挑んだ御家人の気持ちを考えている。（思・判・表／ワークシート・対話）</p>
---	---

7. 備考

本時の学習を通して、「ご恩」と「奉公」に見られる、土地を仲立ちとした主従関係が崩れるきっかけをとらえることができた。また、『蒙古襲来絵詞』をしっかりと読み取らせておくと、『長篠合戦図』などの資料の読み取りや様々な比較もしやすくなる。